

# 幼児ふれあい体験学習における 積極的対児行動を促す指導方法に関する研究（2）

— 生徒の振り返りレポートの分析から —

藤井 志保 今川 真治 村上かおり 掛 志穂  
東 加奈子  
(研究協力者) 権田あずさ

## 1. はじめに

平成20年の学習指導要領の改善に関する答申において、少子高齢化や家庭の機能が十分に果たされていない状況に対する学校教育の在り方の見直しが求められた。これに基づき、平成24年度から改訂された中学校学習指導要領技術・家庭 家庭分野において、このような社会の変化への対応として、「幼児とのふれあい体験を重視すること」が明記された。

そこでは、体験を通して知識と技術などを獲得し、基本的な概念についての理解を深め、実際に活用する能力と態度を育成するために、実践的・体験的な学習活動をより一層重視することが求められている。さらに、知識と技術などを活用して、学習や実際の生活において課題を発見し、自分で解決できる能力を育成するために、自ら課題を見だし解決を図る、問題解決的な学習を、より一層充実することも示されている<sup>1)</sup>。

そこで、本研究の対象校である広島大学附属三原中学校（以下、本校）においても、そのような知識と技術を活用した、体験的かつ問題解決的な学習活動としての、幼児とのふれあい体験学習のよりよい在り方を検討、追究するに至った。

幼児ふれあい体験学習を行う環境である三原学園は、同敷地内に幼稚園、小学校、中学校がある幼小中一貫教育校である。「人と人とのかかわり」、「人間関係力」などをキーワードに、異校種、異学年交流が盛んであり、幼稚園と小学校で、あるいは小学校の異学年間で、「年長組と4年生」、「1年生と5年生」というペア学年がある。さらに小学校と中学校でも、「3年生と7年生（中学1年生）」、「4年生と8年生（中学2年生）」というように引き継がれ、学園全体の行

事（運動会など）を中心に、全学園的な交流活動を行っている<sup>2)</sup>。

このような環境で育まれた生徒たちは、中学校8年生で、家庭科の時間に幼児の心身の成長発達について学習し、さらにその学習内容を体験的・実践的に深められる幼児ふれあい体験学習を行っている。しかし近年のように核家族化や少子化が進み、家庭内にきょうだいがいない子どもが増加する状況において、中学生が幼少期から現在までに幼児と交流をもつ経験には差異があり、そのような経験の違いは、幼児へのかかわり方に影響を及ぼしていると考えられる。

そこでそのような背景を持つ中学生が、家庭科学習における家族の役割や家庭の機能、その重要性の理解、また、幼児の遊びや心身の発達について理解し、幼児への関心を高め、関わり方を工夫できる力を養うための効果的な指導方法について検討を行うことにした。

前報<sup>3)</sup>では、幼児とのふれあい体験学習前後における中学生の対児感情の変化を捉え、ふれあい体験時の中学生の行動分析と考察を通して、個々の生徒がもつ対児感情が、ふれあい体験時の対児行動にどのような影響を及ぼすかについて検討した。その結果、ふれあい体験中の生徒の対児行動に影響を与える要因として、生徒が元来もっている対児感情が影響を与えるだけでなく、生徒自身の一般的な行動特徴や、ペア幼児の性別や特徴なども関与することが明らかとなった。また、幼児とふれあう体験をすることによって、幼児に対する否定的な感情と拮抗的な感情状態が、男子生徒、女子生徒ともに弱まることがわかった。すなわち生徒自身が自己の幼児期の記憶を喚起し、その記憶によって幼児への対児感情に変化が現れるのではな

---

Shiho Fujii, Shinji Imakawa, Kaori Murakami, Shiho Kake, Kanako Higashi, Azusa Gonda: A Research on teaching technique to encourage middle school students to express a positive behavior toward children in contact experience (2). — Analysis of reflective report on contact experience —

いかと考えられる。

以上の結果より、多くの生徒たちが幼児に対して積極的に関わり、共感的な態度を獲得できるような指導方法を提案するためには、体験から得られる学習効果の背景や要因を、さらに追究、検証する必要性が示唆された。本研究では、生徒が自己の感情の変化に気付くことができるように、一定の期間を空けて異なる体験を行い、振り返りをさせた生徒自身の記録の中から、その要因を探る情報を見出すことを試みた。

## 2. 研究の目的

2012年度に本校で実践した幼児ふれあい体験学習(以下、ふれあい体験とする)において、幼児とのふれあい体験を通した中学生の幼児に対するイメージの変化を捉えることを第一の目的とした。さらに本研究では、年間を通して4～5回に渡り継続的に行われる幼児とのふれあい体験を、繰り返して振り返ることにより、中学生が幼い頃の自分に思いをはせ、幼児期の自分と現在の自分とが繋がり、自分の成長過程の振り返りに至るかを検証することも目的とする。

## 3. 研究方法

調査対象者は、本校の8年生81名(男子43名, 女子38名)であった。また中学生がふれあい体験を行う幼児は、広島大学附属三原幼稚園の年中組に属する41名(男児20名, 女児21名)であった。8年生にはAとBの2クラスがあり、Aクラスには41名(男子22名, 女子19名), Bクラスには40名(男子21名, 女子19名)の生徒が在籍していた。人数の関係から基本的には8年生2人と幼児1人がペアを組むこととし、ふれあい体験の開始までにペアの組み合わせを決めておいた。

前報<sup>3)</sup>の成果を踏まえ、本研究では、出会い(初回)の幼児ふれあい体験直後から、一定の期間を空けながら繰り返し得られる中学生の振り返りレポートの内容を分析する。分析に用いた生徒の振り返りレポートは、後掲の表1に示す学習の流れの中で、5月に行ったペ

ア幼児との「出会いのふれあい体験」の振り返り(1回目:5月)、ならびに出会いから約3カ月後に行った振り返り(2回目:8月)である。さらに、学期末(10月)にも、再度ふれあい体験を振り返らせ、幼児とのふれあいからどのようなことを学んだかを記述させた。

1回目の振り返り(出会いのふれあい体験直後)では、ペア幼児とのふれあい体験が楽しかったかどうかについて質問し、また心に残っていることを書き留めさせた。その際、出会った時の様子、自分はどのようにかかわることができたか(どんな応答があったか)、幼児の様子はどうだったか(表情・遊び・ことば・周囲の仲間とのかかわりなど)、困ったことはなかったか、次回に生かすとしたらどんなことができるかなどの具体的な振り返り例をあげた。

2回目の振り返りは、6月の運動会から約2カ月を経て、これから幼児にプレゼントする何かを計画するに当たって、ふれあった幼児のことを思い浮かべながら、ペア幼児とふれあう前と現在とで、幼児に対するイメージが変化したかどうかを中心に振り返りをさせた。

生徒の自由記述レポートの分析にあたっては、部分的にIBM社製のSPSS Text Analytics for Surveys Version 4.0.1を用いた。

## 4. 題材の指導計画

### 4.1 中学8年生家庭科における授業の視点

8年生の家庭科学習では、自分の成長と家族、幼児の生活と家族、家庭と家族関係などの一連の題材の中で、幼児の心身の成長発達について学ぶ。

「なぜ幼児について学ぶか」については、8年生の始めに、①幼児期が人生の土台を作る重要な時期であるため、人の成長について知っておく必要があること、②子育てについて学ぶのではなく、自分にも同じように幼い頃があったことに思いをはせ、自分が母の胎内に生命の灯を灯したときから、家族を始め多くの人に

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
8年 35時間	自分を見つめ 共に生きる	8年生の家庭科で何を学ぶか	自分の成長と家族【A-1】	幼児の生活と家族【A-3】		家庭生活と消費・環境【D-1・2】		幼児の生活と家族【A-3】 【B-1 2 3】 【C-3】	家庭と家族関係【A-2】	衣服の選択と手入れ【C-1】 自分の成長と家族【A-1・3】				
			絵本の世界へ		おやつ作り【生活の課題と実践】		幼児へのプレゼント作り【生活の課題と実践】		くらしを見つめて【生活の課題と実践】					
			幼児のイメージマップ	ペア幼児との出会い	幼児の心と体の発達 幼児についての調べ学習	幼児と家族 幼児の食生活	家庭生活と消費・環境【D-1・2】	幼児の食生活 幼児に適したおやつ作り 布を用いたものの製作	よりよい家族関係 家庭と地域のかかわり	手入れと補修 ミシンの使い方 ペア幼児のための小物作り	幼児とのふれあいのまとめ これまでの自分 これからの自分			
		運動会での交流		運動会のふりかえり										

図1 中学校家庭科(8年生)における題材配列表

支えられて今があることに感謝すること、そして、③これからの自分はどうかを考えること、を学びのゴールとして示した。

本校では、その学習をさらに深めるための具体的な活動として、隣接する附属三原幼稚園の4歳児とペアを組み、1年間で4～5回の交流を行う。そのふれあいを通じて、幼児の成長を感じ取り、自分より幼い子へのかかわり方を学ぶ。また、この体験を通じて、「自分の幼いころ」を振り返り、自分も家族や多くの人々に支えられて成長してきたことに気づき、これからの自分の生き方を見つめるきっかけとなるようにすることを目指している。

図1に、中学校家庭科8年生における題材の配列表を示す。

表1 家庭科の「幼児のふれあい体験学習」における時間の流れ

家庭科(16時間)	
4月	・8年生の家庭科で何を学ぶのか ・自分の幼児期を振り返ろう
5月	ペア幼児さんとの出会い
6月	・幼児の心身の発達について学ぼう① ・幼児とのふれあいを振り返ろう
7月	・幼児の基本的な生活習慣を知ろう ・幼児の心身の発達について学ぼう② ・幼児への贈り物を考えよう ・幼児の食生活について学ぼう
8月	幼児に適したおやつについて学ぼう (夏休みの課題)生活の課題と実践
12月	幼児さんのためのパンダナ作り
1月	幼児さんへのメッセージとビデオレター

#### 4.2 幼稚園4歳児におけるふれあい体験のねらい

幼稚園児にとってのふれあい体験のねらいとして、次の3点を挙げるができる。

①中学生とのふれあいの中で、一緒に楽しむ。

幼児が中学生とふれあい、楽しむためには、安心できる環境や関わりが必要である。そのため、ふれあいの場面では、教師がそばについているように心がけ、中学生との遊びに興味を持てるように園児に話したり、困ったときには手助けをしたりなどする。また、8年生に対して直接アドバイスする場合もある。

②中学生に対して、自分の思い（言葉だけでなく、態度や表情を含む）を出せるようにする。

4歳児の心の発達においては、自分の思いを出せる（表現できる）ことが大切である。同年齢同士なら、思いを出し合い、ぶつかり合うこともある年齢であるが、異年齢、特に年長者に対して、自分の思いを出せること、表現できることが求められる。

③中学生（年長者）に対して、あこがれをもつ。

幼児にとって、自分にいろいろと関わってくれる8年生の姿はあこがれとなり、幼い心に残っていくであろう。例え直接的な記憶として残らなくても、成長したときには何らかの影響を与えるものであると考える。あこがれをもつことで、会うことがうれしい、楽しい、安心できるなどの、プラスの心情が豊かに育まれていくものであると考える。

#### 4.3 題材の流れ

8年生の家庭科学習における題材の流れを表1に示し、以下にその概要を述べる。

4月には、8年生の家庭科で学ぶことについての授業を行った後、5月からの幼児とのふれあい体験に先駆けて、自分の幼児期を振り返らせる授業を行った。

5月中旬に、ペア幼児と初めて出会う、出会いのふれあい体験学習を実施した。8年生が初めてペアを組む幼稚園の幼児と出会う場面である、「出会いのふれあい体験学習」の目標として、次の3点を示した。

①「出会い」にあたり、ペア幼児の名前を笑顔で呼ぶことができる。また自分の名前も幼児に伝え、1年間ペアのお兄ちゃんお姉ちゃんとして、一緒に遊ぶことを伝える。

②幼児の行動や特徴（表情・ことば・あそび・周囲の仲間とのかかわり）を観察する。

③幼児と共に楽しく遊びながら、応答的にコミュニケーションをとる。（幼児が安心して遊べるようなかかわり方を考える。）

またペア幼児との出会いに向けて、適切なかかわり方を考えることと、幼児の基本的な生活習慣がどのようにして身につくのかを理解することを目標として取り組んだ。

出会いのふれあい体験の終了後に、第1回目の振り返りをさせた。その後、ペア幼児に送るメッセージカードの製作を行った。メッセージカードはコピーを取って残し、被服室に掲示して、生徒がいつでも初めての出会いに立ち返り、幼児の成長の様子を実感できるようにした。

6月には、幼小中合同大運動会に向けて、幼児と小学生と共に、踊りの練習を繰り返した。この期間に家庭科では、この体験と結びつけながら幼児の心身の発達について学び、幼児とかかわるときに、思いだけではなく、幼児期の成長について理解したうえで接することができるようにした。特に、生活習慣がどのよう

にして身につくかを理解させるために、授業でも、運動会の踊りをなぜ幼児が覚えて踊れるようになるのかを問いかけ、考えさせた。

7月には幼児期の食生活について学び、ペア幼児を思い浮かべながら、斑で協力して幼児に適したおやつについて考えた。おやつ作りは、夏休みの課題として自宅で調べ学習をするように指示し、夏休み明けにおやつ作りの振り返りを家庭科の課題として提出させた。生徒が考えたおやつを実際に幼児と共に作ることはできなかったが、幼稚園の先生方に試食してもらい、「幼児に適しているか」という視点でコメントをもらった。

例年は、幼児のための絵本を作ったり、幼児と共におやつを作ったりしているが、今年度は生徒たちに、「幼児さんに適したプレゼント作り」、「幼児さんの生活に役立つもの」を何にするとよいかという内容で考えさせ、話し合わせた。その結果、布を使って生活の中で使えるものを作りたいという声が多かったため、布を使った幼児へのプレゼント作りをすることとなった。バンダナに、なみぬいを練習したり、スナップ付けやボタン付けも取り入れ、幼児へのプレゼント製作を通して、衣生活に関する基本的な技能を、より高めることを目的としている。これは冬休みの課題として製作させ、9年生での衣服製作の準備も兼ねている。

## 5. 結果と考察

### 5.1 出合いのふれあい体験後の振り返り

5月11日に行われた初回のふれあい体験には、8年生80名が参加した。体験後に、ふれあい体験が楽しかったかを、「とても楽しかった」、「楽しかった」、「あまり楽しくなかった」、「楽しくなかった」の4つの選択肢から選択させた結果、1名の男子生徒が「楽しくなかった」と回答した以外は、全ての生徒が「とても楽しかった」と「楽しかった」を選択した。ふれあい体

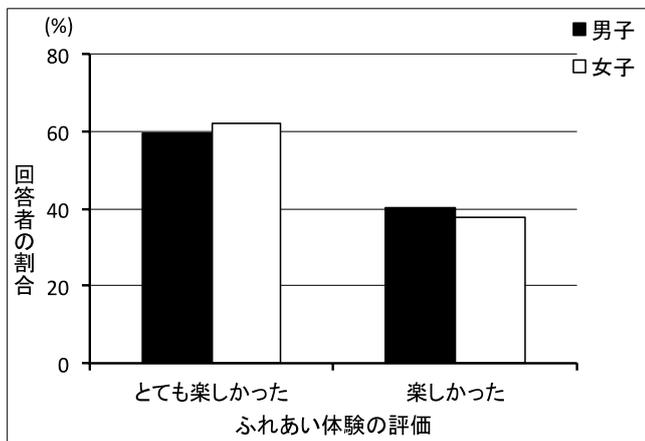


図2 生徒による出合いのふれあい体験の評価

表2 出合いのふれあい体験の振り返りで記述された事前指導に関連した言葉と記述した人数 (%)

言葉 (内容)	男子	女子
家庭科	3 (7.1)	2 (5.3)
自己紹介する	6 (14.3)	6 (15.8)
優しく接する	5 (11.9)	2 (5.3)
目線を合わせる	8 (19.0)	4 (10.5)
笑顔で接する	3 (7.1)	4 (10.5)
安全に気をつける	3 (7.1)	1 (2.6)

験が「とても楽しかった」と回答した生徒の割合は、男子よりも女子の方が高く、「楽しかった」と回答した生徒の割合は男子の方が高かったが、その差はわずかであった(図2)。

事前の授業において、ふれあい体験の目標や、幼児と交流するときの気をつけることなど、いくつかの注意点をワークシートを用いながら示したが、体験後の振り返りの中に、これに関連した言葉が出現したかを、記述した生徒数として表2に示す。

自由記述の中に、事前の授業に関連して「家庭科」という言葉を使用したのは、男子3名、女子2名だった。事前の授業で、幼児と話をするときには、姿勢を低くして目線を合わせ、笑顔で優しく話かけることを目標として示していたが、具体的に「目線を合わせて」や「目を見て」などの言葉を記述した生徒は、男子では8名いたのに対し、女子では4名だけであった。また、「優しく接した」ことを記述した生徒も、男子5名に対し、女子2名であった。さらに、幼児の安全に言及していた生徒は、男子が3名に対し、女子は1名のみであった。

これらの結果は、女子生徒よりも男子生徒の方が、幼児とのふれあいに際しての目標や注意点を、より明確に意識していたことを示すものであろう。ただし、女子生徒がそれらの注意点を意識していなかったというわけではなく、女子生徒がそれらの行動様式を、幼児に接するときの基本的な態度として元来もっており、そのため、特別な意識をすることなくそれができたことも考えられる。

ふれあい体験の目標として、幼児の言葉や遊びだけでなく、幼児の表情や行動的特徴を観察することもあげていたが、自由記述の中に、「幼児さんが笑ってくれた」や「幼児が笑顔で」など、ペア幼児の笑顔について記述した生徒は、男子の半数近い19名と、女子の8名であり、この記述は男子生徒に多く認められた。他方、女子生徒の記述の中に多く出現した言葉として、「かわいい」と「うれしい」があげられ、男子と比べ

表3 出会いのふれあい体験の振り返りで記述された特徴的な言葉と記述した人数 (%)

言葉 (内容)	男子	女子
幼児の笑顔	19 (45.2)	8 (21.1)
かわいい	3 (7.1)	10 (26.3)
うれしい	7 (16.7)	18 (47.4)

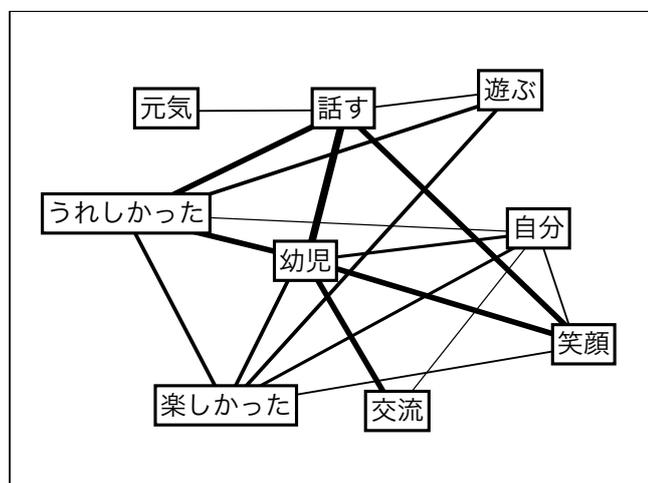


図3 出会いのふれあい体験の振り返り (全体)

て女子では、自己の感情状態に関して記述される傾向があると言えた (表3)。

次に、出会いのふれあい体験の振り返りの記述内容をテキスト分析にかけた結果を図3に示す。この図では、多数の生徒の振り返り記述の中に表れた言葉を抽出して配置し、それらの言葉間の結びつきの強さを、線分の太さで表している。

図から、生徒の振り返りレポートの中に、幼児と話すことに関する記述が最も多く共起していたことがわかる。また、幼児との交流や幼児と接したうれしさ、幼児と話すことができたことのうれしさについての言及も多かったと言える。図中、「幼児」と「話す」の結びつきの強さに対し、「幼児」と「遊ぶ」の間に結びつきがなかったことは、出会いのふれあい体験が、生徒たちにとって、遊びを通じた交流と言うよりも、それ以降の交流に向けたコミュニケーションのスタートとしての意味合いが強かったことをうかがわせる。事前の授業の中でも、幼児との交流において、応答的なコミュニケーションをとることの大切さを伝えておいたが、生徒たちがこれをしっかりと受け止め、幼児と挨拶することや名前を伝えることなど、出会いをその後の活動の準備としてとらえていたことがうかがえる。

次に、同じデータについて、男子生徒と女子生徒を分けてテキスト分析した結果を図4と図5に示す。

これらの図から、男子生徒においては幼児と話せた

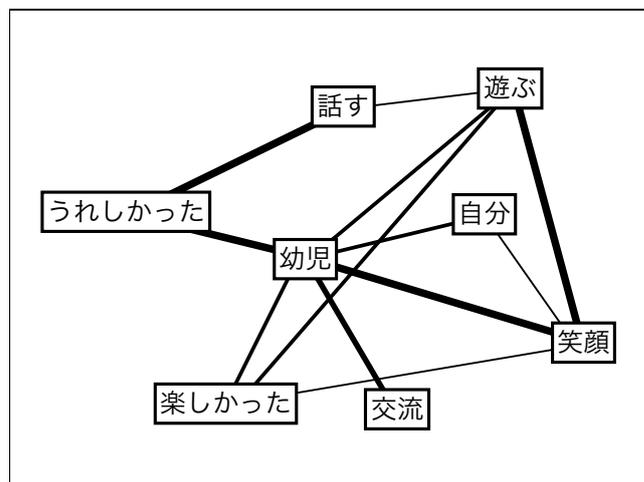


図4 出会いのふれあい体験の振り返り (男子)

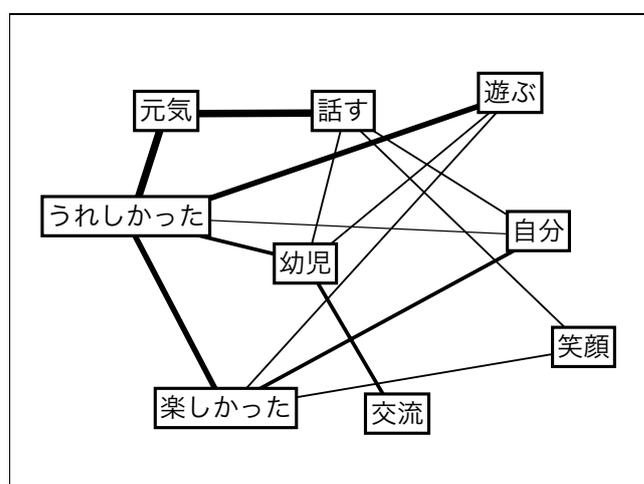


図5 出会いのふれあい体験の振り返り (女子)

ことに対するうれしさや、幼児の笑顔、遊びに関する記述が多かったと言え、女子生徒では、うれしさや楽しさ、元気に話す幼児の様子について記述されていたと言える。両者を比較すると、男子生徒では、ふれあいの場面で幼児をしっかりと観察した結果を中心とした記述が行われているのに対し、女子ではふれあいによって引き起こされた自分の内部での感情状態を見つめた内容の記述が多かったと言えるかも知れない。

## 5.2 出会いから3カ月経過時の振り返り

5月の出会いのふれあい体験にはじまり、6月中は、運動会に向けて繰り返しふれあいの機会があったが、その後は、夏休みを含め約2カ月の間、生徒と幼児がふれあう機会はなかった。夏休みが明けた後の8月31日に、これから家庭科の学習で行う、幼児のためのプレゼント作りに先立ち、第2回の振り返りを実施した。ただし授業の関係で、1クラスの半数にアンケートを実施することができなかったため、回答者数は男子32名、女子26名のみであった。

この振り返りでは、ペア幼児と出会う前と8月末時点の「今」とで、「幼児」に対するイメージがどのように変わったと思うかを中心に記述させた。

生徒の記述内容から、幼児とふれあう前には、幼児は嫌いだった、幼児とふれあうのが嫌だった、幼児とうまく接することができるか不安だった、幼児とのふれあいは難しいだろうと思っていたなどの内容を、明

表4 ふれあい体験前の幼児に対するイメージが肯定的ではなかったと記述した人数 (%)

出会う前の気持ち	男子	女子
嫌だった・嫌いだった	8 (25.0)	3 (11.5)
不安だった	4 (12.5)	3 (11.5)
難しいと思っていた	2 (6.3)	0 (0.0)

確に記述した生徒の人数を表4に示す。

表から、ふれあい前に、幼児に対して否定的なイメージをもっていたり、ふれあい体験に対して不安や困難さを感じていた生徒は、男子に多かったことがわかる。これに、ふれあい体験そのものに対して「面倒くさい」と感じていた生徒を加えると、男子では32名中22名(68.8%)で約7割となり、女子の26名中8名(30.8%)と比較して、倍以上の割合を占めた。

出会いから3カ月経過時の生徒の振り返り記述の中に、「幼児がかわいい」と記述した生徒数と、「幼児とのふれあいが楽しい」と記述した生徒数を、性別に表

表5 出会いから3カ月経過時の振り返りで記述された特徴的な言葉と記述した人数 (%)

言葉 (内容)	男子	女子
かわいい	5 (13.2)	12 (46.2)
楽しい	7 (18.4)	4 (15.4)

5に示す。

幼児を「かわいい」と記述した男子生徒は5名(13.2%)おり、第1回の振り返りよりやや増加した。女子生徒では12名(46.2%)が幼児はかわいいと表記しており、第1回の振り返り時(26.3%)より大きく増加した。また、幼児とのふれあいは「楽しい」という記述も、男女それぞれ15%以上の生徒に認められ、ふれあい体験を肯定的にとらえていることがわかった。

ペア幼児と出会う前と現在とで、幼児に対するイメージがどのように変化したかを、生徒の記述から「よくなった」、「変化していない」、「悪くなった」の大きく3つに分類し、性別にまとめたものを図6に示す。

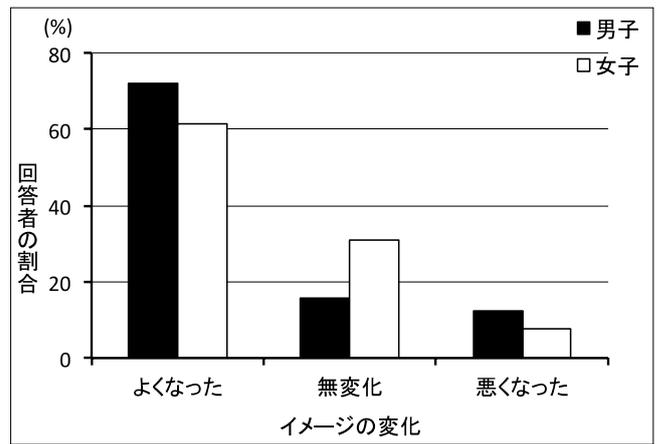


図6 ふれあい体験3カ月時のイメージ変化

男女とも、ふれあい体験を通して、幼児に対するイメージがよくなったと回答した生徒が多かった。特に男子では、約72%の生徒が、幼児に対するイメージがよくなったという内容の回答をした。また女子では、「ふれあい体験前からいいイメージを持っており、体験後もそのイメージは変わらない」と回答した生徒が約30%いた。

男子生徒が記述した、ふれあい体験前の幼児のイメージとして、「わがまま」、「生意気」、「自分勝手」、「言うことを聞かない」などがあつたが、ふれあいを通して、幼児はしっかりしていて、思いやりがあり、言うことをよく聞いてくれる、などとイメージが変化した。また女子生徒では、出会う前のイメージとして「うるさい」、「自分中心」、「落ち着きがない」などがあげられていたが、ふれあい後には、幼児はシャイで人見知りだったなどの記述がみられた。また、男子生徒2名と女子生徒1名は、ふれあいを通して、幼児が現在は「普通の友達」、「一人の友達」となったと記述していた。

ふれあい体験の評価に関連して、「ふれあってよかった」と記述した生徒は、男子5名と女子1名であった。

### 5.3 学期末における振り返り

前期の学期末(10月)に、前期を通じての幼児とのふれあい体験を振り返って、下記の5つの選択肢から、自分に最もあてはまるものを選択させ、その具体的な内容を記述させた。この時までには1名の転出者がいたため、回答者数は男子43名、女子37名であった。

問：幼児さんとふれあって…

A：楽しかったこと

B：嬉しかったこと

C：困ったこと

D：新たな発見をしたと思ったこと

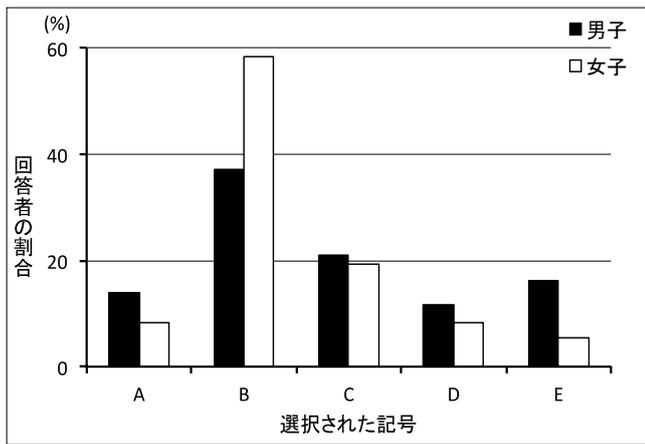


図7 学期末に生徒が選択した振り返り内容

- A: 楽しかったこと
- B: 嬉しかったこと
- C: 困ったこと
- D: 新たな発見をしたと思ったこと
- E: 幼い頃の自分と重ねて考えたこと

E: 幼い頃の自分と重ねて考えたこと

生徒が、5つの選択肢からどの選択肢を選択して記述したかを、性別に図7に示す。

女子生徒では、「嬉しかったこと」を選択したものが約58%で最も多かった。この結果は、やはり女子生徒が、自己の感情状態と結びつけながら、ふれあい体験に対する振り返りを行ったことを示唆している。ただし体験的な学習においては、自分の感情状態に意識を向け、それを適切に表現できることも大切であり、この点では男子生徒よりも女子生徒の方が、上手に振り返りできていたということもできる。

男子生徒でも「嬉しかったこと」を選択したものが最も多かったが(37.2%)、「新たな発見をしたこと」(11.6%)や「幼い頃の自分と重ねて考えたこと」(16.3%)を選択した生徒も少なくなかった。このことから、男子生徒は幼児とのふれあい体験を、女子生徒よりも客観化してとらえているのかもしれない。

本研究の目的でもあった、選択肢Eの「幼い頃の自分と重ねて考えたこと」に関する記述の中には、自分が幼稚園児の時に、中学生とふれあったことを思い出し、幼児だった自分と、自分のペア幼児とを比べたものがいくつかみられた。例えば、幼児だったときの自分がやんちゃをして、中学生のお兄さんやお姉さんを困らせたことや、自分が幼稚園児だったときに、ペアの中学生が自分にくれたのと同じことを、自分が今、幼児に対してしているのだということを再認識したというものがあつた。

また、幼児の行動を見て驚いたことについて、自分が幼児の頃にも同じようなことをしていたと聞かされ、昔の自分を、今ここで現実に見ているように思っ

たという感想もあつた。さらに、無邪気に遊ぶ幼児を見て、自分もいつまでもこの無邪気を忘れないでいたいという記述もあり、幼児の行動から現在の自分を見つめ直すきっかけになったことがうかがわれた。

## 6. まとめと今後の展開

本研究では、附属三原中学校で実践した幼児ふれあい体験学習において、幼児とふれあうことによる、中学生の幼児に対するイメージの変化を捉え、その結果を基に、積極的な対児行動を促すための指導方法を探ることを目的とした。

生徒のふれあい体験の振り返りレポートを分析したところ、女子生徒と比べて男子生徒の中に、ふれあう以前から幼児に対する否定的なイメージをもっていた生徒が多く、ふれあい体験そのものに対しても「面倒」なイメージを持っていた生徒が多かった。この結果は、前報<sup>3)</sup>で調査した幼児に対する対児感情尺度の分析結果において、男子生徒の方が、幼児に対する否定的感情を表す回避得点の値が高かったことと一致する。前報では、出会いのふれあい体験を経験しただけでも、男子生徒の幼児に対する否定的感情得点が低下したことを報告したが、本研究で行ったその後の継続的な振り返りの記述内容から、その変化が長期にわたり継続するものであることが確認できた。

幼児とのふれあい体験においては、女子生徒よりも男子生徒の方が、事前の学習における目標や注意点をより意識して臨んでいる傾向が認められ、幼児の笑顔に関する言及が多いなど、幼児の行動や特徴についても、より客観的に観察することができていることがうかがえた。一方女子生徒については、対児感情尺度の分析結果において、幼児に対する肯定的な感情を示す接近得点が高いことがわかっており<sup>3)</sup>、そのため幼児とのふれあいにおいては、当初から、幼児に対する親和的な関わりかけが表れやすいと考えられる。幼児に対する親和的な関わりかけや態度は、幼児への共感性と結びつきやすいため、幼児の感情状態を自分自身のことのように受け止めることに繋がり、その結果としては自分自身の気持ちに関する記述が多く現れたのではないかと考えられる。

男子生徒と女子生徒の振り返りレポートの記述に表れるこのような違いは、上述のように男子と女子がともに備えている幼児に対する肯定的・否定的感情の持ち方の違いに起因していると考えられるが、それぞれがもつこのような対児感情の違いが、ふれあい時の対児行動の違いとして表れることは前報<sup>3)</sup>で報告したとおりである。そこでは、女子生徒(肯定群)の方が幼児との距離を短くとり、より積極的に幼児に関わり

かけていたことを示したが、女子生徒が幼児により接近して積極的に関わる行動傾向は、幼児の行動を客観的に観察することを妨げる可能性もある。逆に言えば男子生徒（否定群）は、幼児と一定の距離をとりながら関わりかけていることによって、幼児の行動を客観的に観察する余裕を持ち得ている可能性があり、その余裕は、幼児の行動から自己の幼児期を振り返ることに繋がりやすいと言えるであろう。

本研究では、幼児とのふれあい体験を通して、中学生が幼児の姿に自分の幼い頃を重ね、これまでの成長の過程を振り返ることができるかを検証することを試みたが、学期末の振り返りにおいて、自分の幼児期に関する記述が多く認められたのは男子生徒であった。この結果も、男子生徒の方が、幼児の行動や様子を、より客観的に観察することができており、その姿に自分の幼い頃を重ねていたことを示唆するものである。一方、女子生徒も振り返りの中で、幼児の気持ちに共感しながら、自分自身の感情状態をみつめている様子がみられ、そのような共感的態度を上手に方向付けてやることによって、これまでの自分の成長過程を振り返ることができるのではないと思われる。

ふれあい体験の目標でもあったように、幼児期の自分と、現在ふれあっている幼児とを重ね合わせることは、幼児に対するより肯定的なイメージを惹起し、幼児に対する積極的な関わりかけの元となると考えられる。そのため、生徒の性別に関わらず、ふれあい体験の繰り返しの中で、より客観的に幼少時の自分と重ね合わせるような振り返りを行わせることが求められる。

幼児とのふれあいの体験の今後の展開として、現在幼児へのプレゼントとして製作しているバンダナに、ペア幼児の名前を刺繍したり、幼児が好みそうな絵などを工夫して入れる。プレゼント作りの風景はビデオに収め、幼児へのメッセージを入れて、ビデオレターとして幼児に贈る予定である。

家庭科は、家庭の協力を得ることができると、より活動内容が深まるものであるため、本校における家庭科学習においても「家庭との連携」を意識して取り入れるようにしている。今回も、プレゼントを贈るときには、幼児だけでなく、幼児の家族へのメッセージも加える。中学生は、幼児の家族へも「幼児さんとふれ

あって学んだこと」や、「今の中学校生活のこと」などを書いて伝えるようにする。中学生にとっては、その文章を書くことが、再度ふれあい体験の振り返りになり、「今後の自分」を客観的に考えることにつながると思われる。一方、幼児の家族は、「我が子のことを、中学生がどう感じていたのか」を知ることができ、「我が子が中学生になったらどんな子どもに成長するだろうか」ということを考えるきっかけにもなるであろう。

またそのバンダナを、「幼児さんが中学生になるまでとっておいて、中学校での調理実習で三角巾として使ってもらえたらうれしいこと」を書いておくように指導する。三原学園は、12年間の幼小中一貫教育であり、結果でも述べたように、幼少期に自分がしてもらったことを、今度は自分が幼い子にしていくという流れがある。中学生になり、幼い頃にしてもらったことを思い出せる心優しい子に成長し、自分より幼い子へも思いやりを持って接することができるようになって欲しいと願っている。

こうした一連の活動を通じて、中学生は改めてペア幼児のことや自分のこと、幼児期が重要であること、家族への感謝、これからの自分について考えてほしい。それをさらに深めるために、幼稚園側からの対応として、ペア幼児から中学生に、「お兄ちゃんお姉ちゃんの似顔絵」と「家族の方からのメッセージ」が届く予定となっている。ふれあい体験学習の最後のまとめに、幼児が描いた絵を見ながら、幼児の個性や頭足人などの、人の成長にかかわる事柄や、幼児の家族の、子どもに対する思いなどを感じることができると考える。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説技術・家庭編』教育図書
- 2) 藤井志保 (2012) 「特別活動と効果的な関連をはかった中学校技術・家庭科 (家庭分野) の題材開発—幼児とのふれあい体験学習—」 広島大学附属三原学校園研究紀要, 第2集, pp.210-217
- 3) 藤井志保, 今川真治, 鈴木明子, 村上かおり, 谷原千代, 掛 志穂, 権田あずさ (2012) 「幼児ふれあい体験学習における積極的対児行動を促す指導方法に関する研究 (1)」 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 第40号, pp.105-110